

音色は青をつつむ

荒川
美和



第26回「ちゅうでん児童文学賞」

さくら賞 受賞作品

「結衣、起きなさい。」

今週も始まってしまった。あんなに暑かった夏休みも終わり、二学期が始まった。毎日まだまだ暑い中の登校は、全てのやる気をなくす。それでも、友達に会いたくて何とかこの一か月をすごしてきた。

「もう月曜か・・・学校最悪！」

とふとんの中でつぶやく。学校が最悪だと思い始めたのは、十月の始めだった。毎日元気が出ない。何をやっても楽しくない。特に月曜日は一番気分が落ちこむ。友達との会話も、大好きな音楽の授業もワクワクしない。

ピアノの発表会があったのは先月のこと。発表会でひく曲をピアノ教室のさやか先生にもらったのは、三か月前の六月だった。どんな曲をひくのか、もしかしたらあの曲かな・・・と楽しみにしていた。私は新しいちよう戦に、希望とやる気でいっぱいだった。

六月から、私は毎日たくさん練習してきた。友達と遊ぶ時間もがまんして、何よりもピアノの練習をゆう先してきた。練習がいやだなと思う日もあったけれど、あこがれていた曲をもらえたよろこびで、がんばる事ができた。

私もらった発表会の曲は、一年前の発表会で、同じピアノ教室の一つ上の学年の明希ちゃんがひいていた曲だ。明希ちゃんはピアノがとても上手だ。いつも音が正かくだし、テンポも速くなったりおそくなったりしない。強弱も上手で、聞いていて心地よい。学校では、運動も勉強も得意で、クラスの人気者だ。私は明希ちゃんにアコがれていた。そんな明希ちゃんが去年ひいていた曲を、私もひけるんだとほこらしかった。少しずつ仕上がっていく曲に、自信も出てきた。明希ちゃんにどのくらい近づいているだろうと考えるとワクワクした。一音一音ゆっくりひいていた指が、少しずつリズムミカルに動き出す。苦手なリズムも練習のおかげで、転ばずひけるようになってきた。

ある日のピアノのレッスン。さやか先生に

「すごい！がんばったね！」

とほめられた。すぐくうれしかった。友達と遊ぶ時間をがまんして良かったと思った。後悔はなかった。今年の夏休みは、ほとんどと言ってもいいほど、多くの時間をピアノの前ですごした。私はどうしても、この曲を発表会ですてきにえんそうしたかった。

もし、明希ちゃんより上手にひけたらどんなにうれしいだろう・・・そう思った。次の日もその次の日も私は必死に練習した。うでやかたが痛くなった。それでもがんばっ

た。

かくふの角が、練習の度にめくるのでおれ曲がっていた。私はおれ曲がったかくふの角をていねいにのばした。あと少して夏休みが終わる。夏休みにがんばった事は、もちろんピアノの練習だ。絵日記にもその事を書こう。私は絵日記の紙をランドセルから取り出した。

2

発表会当日。きんちようするのが当たり前のこの日がやってきた。前の子がひいている間、私はステージうらで自分の番を待っていた。次は、私の番だ。

(きんちようはするけれど、明希ちゃんがおどろくような、なつかしいと思うようなえんそうをしよう！)

と心の中でとなえた。

ステージに行く前、さやか先生に言われた。

「えんそうを聞いているのは、みんなじゃがいもだと思ってごらん。」

いよいよ本番。練習でオクターブがギリギリとどく事が分かっていた最後のフレーズ。
(本番もはずさないといいな。)

すてきなえんそうはしたいけれど、このきんちょうに勝てるのか不安になってきた。不安もきんちょうもいっぱいの中、そして、お母さんも妹も他のお客さんも見守る中、私は練習してきた事や楽ふを思い出して一生けん命にひいた。そして、あこがれていた曲をひいているという事を楽しもうとした。

えんそうは、ついに最後にせまってきた。

(よし、あともうちよつと・・・)

だが、一番いいところでつつかかった。三か月前から、一生けん命たくさん練習してきたのに・・・私はどうしていいか分からなくなった。この場から、この失敗からにげ出したくなった。でも、ここでにげたら、もっと大きな失敗になってしまう。

泣くのをぐつとこらえて、さつきよりテンポを落としてひいた。何とか最後までひけたけれど、ちつともうれしくなかった。今までで一番長いえんそうに感じた。会場からはく手が、本来なら温かいのに、悪口のように聞こえた。

「はあ・・・」

発表会が終わった直後、私の次にひいた、同じピアノ教室の一つ上の学年の祥吾くんがかけよってきて言った。

「お前のせいでなんかひどい空気になったじゃねーか。ま、俺のえんそうで取りもどしてやったけどな。感しゃしろよ！」

「……ありがとうございます……」

落ちこんでいたので、小さな声しか出なかった。

「なんだよ、その言い方。俺が年上で、ピアノの実力もお前よりはるかに上なのに、その言い方かよ。はあ、ざんねんだなあ……」

と言いながら、去っていった。

私はそのたい度に少しイラっとした。

でも、やっぱり私は大きな失敗をしたんだと、祥吾くんに言われてさらに実感した。そして、私が一生けん命練習してきたのを、否定されたみたいなのが、何より悔しかった。私は、心の中で色々な気持ちがこみ上がってくるのを感じた。大きな失敗をした後悔、だれにも言われなくなかった今までの練習の否定とムカつくたい度。悔しさと悲しさでいっぱい、なみだが止まらなかった。泣いても泣いても、なみだは止まらなかった。つらい気持ちを流してはくれなかった。でもつかれた私は、いつの間にかねむって

しまった。

目を覚ましたら、自分の部屋のふとんの中だった。家に帰ってきた記憶がない。

「結衣！もう夕飯になるよ。おりてきて！」

「お姉ちゃん、ねすぎ！早くしないとお姉ちゃんの方も食べちゃうよ！」

と一階にいる妹とお母さんの声が、私の部屋までひびいてきた。

そうだった。私は発表会が終わり、ずっとねていたのだ。おなかはすいていなかった。だから、正直妹に食べられても良かった。

「発表会おつかれ〜かんぱ〜い！」

「・・・ありがとう。」

お母さんがいつもより特別な夕飯を用意してくれた。私が好きな物がいっぱいだ。からあげ、フライドポテト、マカロニサラダ、ピザ。どれもおいしそうなのに・・・。

「どうしたの？結衣の好きな物ばかりよ。結衣はよくがんばったよ。お母さんは今日だれのえんそうよりも結衣のえんそうが上手だったと思ったよ。」

「お父さんも、そう思ったよ。」

「でも・・・私まちがえちゃったもん。」

「お姉ちゃん、まだ気にしてるの？最後までひけたからいいじゃん。」

「ひまりには分からないよ！」

私は夕飯を食べずに、さつきから心配して私の方を見ている犬のジュンを部屋につれてもどった。

ジュンが家族の一員となったのは、もう三年前の私の入学式の日のことだ。お父さんは、入学式の時も仕事がいそがしくて、お母さんと入学式に行った。終わって家に帰ると、十一時を過ぎていた。おなかすいたな〜と思いつつも、ピアノのいすにすわり、練習を始める。練習が終わったのは、十二時を過ぎていたころだった。どんな時もピアノの練習はかかさない。

お父さんが帰ってきたのは、八時ごろだった。お父さんは、会社の人の家の犬が赤ちゃんと産んだから、むすめさんの入学祝いと言われて、もらってきたらしい。とつぜんの家族がふえておどろいた。でも、すごく可愛い男の子の犬だった。まんまるの目で私を見つめている。クンクンと私のおいさをかいてる。前から犬をかってみたいと思っていたから、大事にお世話をしようと思った。少しづつ犬と過ごす時間がふえていった。犬はいつも私を見つめて、何をするのも一緒だ。日に日になつてくれて、ぎゅっ

とだきしめると安心するそんざいになった。

ふと、私は名前がついていないことに気がついた。

「名前、どうしようかな・・・」

しばらく考えていると、犬が私達を順番に見つめている。その時、名前がぱっとひらめいた。

そして、お母さん、お父さん、妹に言ってみた。

「そうだ！ジュンって名前はどうかかな？」

家族が私に目を大きくして注目してきたので、だめだったかなと思っていたら、

「良い！結衣、それいい考え！」

「いいぞ！今日犬をもらった人に、ほうこくしてくる！」

「お姉ちゃんのひらめき力、最強〜！」

「ワン！ワン！ワン！」

と三人と一匹が大さん成してくれた。そしてジュンが、「大！さん！成！」と言ってくれたような気がした。犬をもらった時ぐらい、うれしかった。

その日から、私は「犬」ではなく、「ジュン」と呼ぶようになった。

せい別はちがうけれど、私にとって一番の相談相手のジュン。だれにも話せない事も、ジュンにはこっそり打ち明けられた。ジュンは首をかしげながらも、いつも話を聞いてくれていた。

「聞こえてたと思うけれど、私、ピアノの発表会で大失敗しちゃったんだ。いっぱい練習してきたのになぁ……。同じようにピアノを習っている祥吾くんっていう人がいてね、その子にえんそうの後にいやみを言われて、それがとってもつらかったの。前の人が失敗したら、よけいにきんちようするし、自分も失敗したらって考えたんだろうけれど、落ちこんでいる私にあんな言い方しなくてもいいのに。」

とジュンに分かるように、ゆっくり説明した。ジュンは、首をかしげながらも、
「く〜ん」

と鳴いて、悲しみを分かってくれたような気がした。その時、私は悲しみがちよつと少なくなつたような感じがした。そして、ぎゅつとだきしめた。

お母さんは子どものころピアノを習っていた。いやになっても、ピアノニストになる夢をあきらめたくなくて、たくさん練習してきたらしい。ピアノニストにはならなかったけれど、ときどきリビングのピアノをひいている。私はそんなお母さんにあこがれていた。だから、お母さんはピアノの事を話しやすい相手ではあるが、仕事がいそがしく、平日は話すひまがない。土日は休みだけれど、妹にお母さんをひとりじめされてしまう。

私は発表会の失敗をだれかに聞いてほしかった。でも同じくらいその失敗を話すのがこわかった。私の失敗の話を聞いたら、聞いた人はどう思うんだろう……。

朝起きて学校に行き、学校から帰って宿題とピアノの練習。夕飯をてき当に食べ、お風呂に入り、歯みがきをしてねる。ジュンと遊ぶ時間だけがゆいいつの楽しみだ。これが私のふだんの生活。これからこんな生活になりそうだ。何だかつまんないな。

発表会のあの日から、私はすっかり自信がなくなって、人前で何かをするのがこわくなった。学校では、みんなの前で発表しようとする、声が小さくなり、足がふるえる。

手をあげた時は答えに自信があったのに……。ピアノの発表会で失敗してから、学校に行きたくない。学校に行きたくなくて休みたいけれど、妹がいると学校を休みたいとお母さんにも言いにくい。

「学校やっぱり行きたくないな……。」

4

「あゝあ、早く冬休みになってくれないかなあ。」

キンモクセイが香るころ、そんな事を思う日々が二週間続いていた。今日は十月十九日。今日の朝も、あいかわらず気分が上がらない。けれど、いつもよりは、何だか気分が安定している。何だろうか……。

いつものように、キンモクセイが庭に満開に咲いた目黒さんのお家を曲がり、たまちゃんがいる美和子おばさんの家の前を通り、学校へ向かう。たまちゃん元気かな？

重い足を一步一步進めて、学校にたどり着く。ようやくいやいや教室に入る。クラスの鈴花ちゃんがかけてよってくる。

「結衣ちゃん、おはよう。なんか最近元気ないよね？」

「・・・そんなこと、ないよ。」

「ならいいけれど。何かあったら話聞くよ。」

「ありがとう。」

鈴花ちゃんが気にかけてくれるのはありがたいけれど、今はそっとしておいてほしい。自分の気持ちを話すのは、とても勇気がいる。気持ちを分かってもらえなかったらと思うとこわい。

それでも、いつもよりは気分が安定したまま、一時間目国語、二時間目算数と一つずつこなしていく。心の波がよせてはひいていく。

二時間目の後の休み時間の事だった。自分の安定した気持ちを不思議に思うまま、トイレをすませ手をあらっていたら、

「すごい！そのかみの結び、お母さんにやってもらったの？」

と名前も知らない先生に話しかけられた。お母さんに結ってもらったあみこみの事をほめてくれたみたい。

私を通してある学校の四年生のトイレは、先生と生徒が一緒の場所なのだ。だから、名前も知らない先生と会うのはなれた事だけれど、話しかけられたのは初めてだ。

「あ、．．．はい。」

「毎日やってもらってるの？」

「はい。」

「へえ、結衣さんのお母さん器用ね。」

と言われた。先生はちらっと私の名札を見た。

「あ、．．．ありがとうございます。ちなみに、先生のお名前はなんですか？」

名札が反対になっていたので、聞いてみた。すると、

「あ！もうこんな時間！ごめんね。五年三組のじゅ業に行かないと。」

そう言っつて、五年三組の教室へ向かって行ってしまった。名前は聞けなかったけれど、

五年三組には、明希ちゃんがいるクラスだ。

「今度明希ちゃんに聞いてみよう！」

いつもより気分が安定している意味が何となく分かった。このドキドキした出来事が私を待っていてくれたのかもしれない。今日はこの事で、六時間をがんばれる事ができた。

明るい顔のまま、家まで帰れた。

明希ちゃんの家は近所だから、帰りによっていった。

ピンポーン。

ちょうど、明希ちゃんがげん関のドアを開けて出てきた。

「どうしたの？結衣ちゃん。」

「ちよっと聞きたいことがあつてきたんだけど・・・」

「なに？」

「明希ちゃんのクラスの二時間目にきた先生の名前教えてほしいんだけど。あのく分かるかな。女の先生で、かみはかたぐらいまでの長さで、あとは・・・めがねかけてたかな。」

「・・・あくあの先生ね。恵末先生、やさしい先生だよ。授業がなければ、職員室にいると思うけど・・・でも、なんで？」

「まゝ理由はまた今度言うから。ありがとう！」

結衣は先生の名前が分かって嬉しくなつてスキップで家に向かう。

「結衣ちゃん！今日なんかいい事あった？」

急いで追いかけてきた明希に言われる。結衣は止まって、後ろをふり返って言った。

「別にないけど！」

そしてうれしい気持ちをごまかして、笑顔で家に帰った。

帰ると妹とお母さんとジュンがいた。

「お帰り！」

「ワン！」

今日は夕飯もおかわりできたし、お風呂は妹と入れたから久しぶりに楽しい一日だった。ねる前、ふと恵未先生のことを思い出した。

「恵未先生なら、私の話聞いてくれるかな……。」

5

次の日は、学校から帰ってからすぐにピアノのレッスンがあつていそがしいせいか、何だかぼーっとして帰った。

(今日はちょっとピアノのレッスン行きたくないな。)

だれかが後ろにいる気配がして、ふり返ってみた。すると、近所の美和子おばさんが、重い荷物を両手に持って、苦しそうに歩いてきた。私はかけよって声をかけた。

「美和子おばさん、大丈夫ですか？」

「あら、結衣ちゃんじゃないの。お帰りなさい。えっとね、れいぞうこを開けたら、食ざいが全然入っていなかったのよ。だから、近くのスーパーによって、たくさん買わずぎちゃったの。」

「かた方お持ちしましょうか？」

「本当？とても助かるわ。じゃあおばさんの家まで運んでもらってもいいかしら？」

「はい。」

私はピアノのレッスンがある事を忘れかけていて、いきおいでそう言ってしまった。

(どうしよう・・・いまさらピアノのレッスンでしたなんて言えないからな・・・。)

美和子おばさんのペースに合わせながらも、私は急いでおばさんの家まで歩いた。

「はあ、はあ、はあ・・・ありがとう。結衣ちゃん・・・。」

「いえいえ。それより、おばさんに合わせたつもりではいたんですけど、歩くペース、速すぎましたか？」

「・・・ちよつと速かったかな。そういえば今日、結衣ちゃんいつもより暗い顔してたけれど、何かあったの？」

「・・・いえ、大した事ではないんです。学校の授業につかれていますだけですよ。」

「でも、今日だけじゃなくて、最近も暗い顔していたのを見たの。本当に大じょう夫？」

「・・・。」

私のだまりこんだから、美和子おばさんは気をつかってくれたのか

「別にせめてるわけじゃないの。ただ、私でも力になれることがあるなら、遠りよなく言っただけよ。あ、結衣ちゃん今日習い事は？あつたら急がないと。」
私はピアノレッスンがある事を忘れていた。美和子おばさんに返事もせず走り出した。
美和子おばさんは、そんな結衣を笑顔で送り出してくれた。

夜になって、美和子おばさんに悪い事をしたなどふとんの中で思った。それと同じくらい美和子おばさんが日ごろの私の様子を見ていてくれた事に気づいて、はずかしい気持ちとうれしい気持ちを感じながら気づいたらねむっていた。

6

連休は、楽しく過ごす事ができた。友達と遊んだり、(途中妹にじゃまされたけど・・・)
名古屋のおばあちゃんが遊びに来てくれて、いっしょにごはんを食べたり、好きな物を
買ってもらったり、楽しい事ばかりだった。

「来週の金曜日のハロウィンも楽しい事ができるといいな。」

毎年ハロウインは、私たちは姉妹で明希ちゃんの家で開かれるハロウインパーティーに参加した。

みんなでかそうをしたり、おかしをいっしょに食べたりする。少し先に何か楽しい予定があるとがんばれる。

十一月に入ったばかりのある日、まだ人前で話すのは怖くてなやんでいた。朝ごはんを食べようと食たくに行くとき、お父さんが先にすわっていた。お母さんはキッチンで朝ごはんのしたくをしている。私は、お父さんとお母さんに、

「今日、帰りが遅くなるかもしれない。」

と伝えた。なんで？　と言われるのがいやだったから、朝ごはんを食べ終わるころ、急いで言って走って学校に向かった。

なんで？　と聞かれた時のために、理由は考えておいた。

その作ったうその理由は、“近所の明希ちゃんに勉強を教えてもらうから”と言おうとしたのだ。妹は、こういう時すぐに行きたがるから、

「四・五年生レベルの勉強だから、ひまりにはむずかしいと思うよ。」

とつけくわえて言えば完ぺきだと思った。そこまで考えていた。でも、本当の理由は、

職員室に行つて恵未先生を見つけて、今の悩みを聞いてもらおうという時間が長くかかり
そんな事をするのだ。

放課後、勇気を出して職員室に向かう。

（恵未先生はどう思うだろう……。とつぜんこんな話を聞いておどろかないかな？そ
もそも他の先生たちに聞かれたら……。）
自分のクラスから職員室まであれこれ考えていたら、あつという間についてしまつ
た。

「失礼します。四年一組の青羽結衣です。恵未先生に用事があつて来ました。」
近くにいた奈々子先生が

「あら、結衣さん。恵未先生に用事があるのね。ちょっとそこで待つてね。」
と言つて恵未先生を探してくれた。良かった、何の用事か聞かれなくてほつとした。

恵未先生は笑顔でこちらに向かつてくる。あの日トイレで初めて会つた時と同じやさ
しい表じようで、きんちようしていた気持ちがあすーっと楽になった。

「あつ！この間トイレでお話したわね。今日は私に何か用事があるの？」

「えっと・・・それは・・・」

すると、まわりを気にしていた私に対し、

「他の場所で話そうか。」

と言っつてにっこり笑ってくれた。こういう時、私はすぐに“やっぱり何でもありません”とか、“用事を忘れてしまいました”と言っつて、すぐその場からにげてしまう。でも、今日は心の中で決心した。

（ほかに話せる相手はいないんだし、ここで話さないと！）

私は、そんなことを考えながら、保健室のとなりの部屋の前に来ていた。ドアには、『ほかほかルーム』と書かれていた。

（なんだろう？この部屋。こんな部屋あったかな？）

と思いつながら、部屋の中に入って行く。だれもいなかったけれど、教室にあるつくえやイスなどはあった。日当たりが良くて、静かな部屋だった。

「ここはふだん、だれかが使っている部屋なんですか？」

「かんとんに説明すると、ここは教室に入るのがいやな子や苦手な子が来てもいい部屋なんだ。この部屋に来てただ休むのではなく、みんなと同じように勉強だつてするし、休み時間だつてあるのよ。」

「・・・・・・・・」

こんな部屋が学校に用意されていたなんて知らなかった。結衣はおどろいた。

「ところで、結衣さんが悩んでいる事を、私に教えてくれないかな？」

恵末先生に笑顔で言われたけれど、きんちようが高まっていた。深ききゆうをして、勇氣を出して言ってみた。

「私は、ピアノを習っていて、ピアノの発表会が九月にあっただんです。五年三組の明希ちゃんが去年にひいていたあの曲をひきました。発表会はきんちようするけれど、楽しみだったんです。その不安ときんちようの中、一生けん命ひいていた結果、曲がもう少しで終わるころに、失敗してしまいました。それでも、あきらめずに最後までひききつたのに、五年三組の明希ちゃんと同じクラスの祥吾くんにいやみを言われました。三か月間、何よりピアノの練習をゆう先して一生けん命やってきたのに……。それから人前で、何かを話したりする事がこわくなってしまいました。」

時は
私はいつの間にかなみだを流していた。深ききゆうをして、また話し始めようとした

「ありがとう、つらいのに話してくれて。その出来事で、学校に行きたくなくなったん

だね？」

と言って私をだきしめてくれた。

そして、少しすると・・・

「結衣さんは、いやな出来事をかかえながら、いつも一生けん命学校に来ていたんだね？」

「はい。」

恵末先生が私の気持ちを聞いてくれて、気持ちを知らうとしてくれた事が、何よりうれしかった。恵末先生は温かい手で私の手をにぎりながら

「無理して教室に入ろうとしなくていいんだよ。結衣さんは、このほかほかルームっていうにげ場を知らなかったけれど、私と話してこの場所知ることができたから。明日からはここに逃げてきていいんだよ。」

「いつからだだったらいんですか？」

「いつでもいいよ。朝からだっていいし、給食の時だっていいし、いやな気持ちの時、いつでも来ていいよ。」

「ありがとうございます。」

「あ！結衣さん、もう四時すぎてる！お母さん心配されているだろうから、そろそろ帰

ろうか。」

「大じょう夫です。お母さんにもお父さんにも、今日帰りがおそくなるかもしれないと言っているのです。」

不安な気持ちが小さくなって、心がポカポカしてきた。きんちようでつめたかった私の手は、恵末先生がにぎってくれたのもあって、温かくなっていた。

「じゃあ、もうちょっと聞こうかな。結衣さんは、学校で何が一番いやかな？」

「私は、ピアノの発表会の失敗があつてから、自信がないので、授業中が一番いやです。発表する前は自信があるけれど、先生に当てられると、足がふるえたり小声になつてしまつたりして……」

「そっか。じゃあ、たんにんの先生に、結衣さんの事言っておくから。明日は、たんにんの先生に、『ぼかぼかルームへ行きます。』って言えるかっていうミッションね。」

「ミッション、ですか？」

「今日は、私に学校がいやな理由を話せた。これがミッション。だから、明日も出来なくても大じょう夫だけど、いちおう私からミッション出してみようと思つて。」

恵末先生は明るくそう言つた。ミッションなんて……そう考えたら少しだけ学校に行

くのが楽しみになった。

やっぱり恵未先生に勇気を出して話して良かった。自分の気持ちを話すのは勇気がいるけれど、きょう感じてもらえたり、自分のありのままの気持ちを受け止めてもらえたとほっとする。明日からは、恵未先生にこっそり気持ちを伝えよう。にげ場所ができたことで、自分のい場所が見つかったような気がする。私は夕日をせ中に家に向かって歩くと、いつもより全身が温かくてオレンジ色につつまれていた。

7

次の日曜日。私は明希ちゃんと公園で会う約束をした。約束の時間より早く着いてしまった。ブランコに乗り、恵未先生と話した事を思い出しながら、明希ちゃんが来るのを待つ。

「ごめんね、おそくなって。」

「ううん。はりきっちゃって時間より早く着いちゃっただけ。」

「そっか。じゃあ、なにする？」

私はベンチにすわりながら言った。

「実は、今日は遊ぶために約束したんじゃないなくて、相談しに来たの。」

「なに？相談って。」

「最近ね、学校がいやな理由を恵末先生に話したんだ。で、その理由を明希ちゃんにも聞いてほしいなと思って。」

明希ちゃんは、私を見てびっくりしていた。でも、となりにすわって

「うん。つらくなければ、話してみて。」

と言ってくれた。

「その理由はね、九月のピアノの発表会の事なんだけど、私と中で失敗したでしょ？」

「・・・うん。」

「でね、発表会が終わった直後、祥吾くんにね、いやみを言われたんだ。」

「なんて言われたの？」

「『お前のせいで、なんかひきにくい空気になったじゃねーか。ま、俺の演奏で取り戻してやったけどな。感謝しろよ！』って言われたの。たしかにひきにくくしちゃったかもしれないけれど、私だっつてがんばってひいたのに。三か月必死で練習してきて、私だっつて失敗したくしてたわけじゃないのに。」

私は、恵未先生と話した時と同じように、なみだを流していた。すると、明希ちゃんが私の中をさすってくれた。私はほっとした。明希ちゃんはお姉さんだけでなく、話すまで分かってくれなかったらどうしようと思わずと考えていたからだ。そして、少しすると

「その出来事がきっかけで、学校に行きたくなかったんだよね？」

私は、深くうなずいた。

「・・・今の結衣ちゃんには、そう思うのはむずかしいかもしれないんだけど、私はね、失敗はしていいものだと思うんだ。」

「・・・どうして？」

「だって、失敗しないと何にもできないし、始まんないよ。新しい事に挑戦できなくなる。」

「ってことは、明希ちゃんも何か失敗したことがあるの？」

「いっぱいあるよ。私が運動会の対こうリレーのアンカーで、私が転んだせいでビリになったこともあるし、授業で発表して答えを間ちがえたことだってあるし。」

私は明希ちゃんの話聞いて、失敗はしていいものだと知った。でも、一番びっくりしたのは、明希ちゃんが失敗をしたことがあることだ。いつも完ぺきなイメージだった明

希ちゃんが、失敗をたくさんした事があるなんて・・・。

明希ちゃんはやさしい笑顔で私に話しかけた。

「ピアノの発表会で結衣ちゃんは間ちがえちゃったけれど、とてもきれいな音色だったよ。私ちよつとくやしかったんだよ。去年の発表会で、私はあんなきれいな音出せてたのかなって・・・。失敗に負けないくらいいんしょうに残る音色だったなって私は思ったよ。」

私はまたなみだが出てきた。でも今度のなみだはさつきとちがう。うれしくて明希ちゃんのやさしい言葉でむねがいっぱいになった。何だか心が軽くなって、私は少し前に進めた気がした。

8

最近寒くなってきた。はく息が白い日もある。

（そろそろ学校に行く時も上着が必要かな）

そんな事を考えながら、学校に向かう。いつもの道を歩いていると、前から美和子おばさんが歩いてきた。

「あら、結衣ちゃん、おはよう。」

「美和子おばさん、おはようございます。」

「結衣ちゃん、前にお話した時より元気そうね。いいお顔しているよ。」

「そうですか？」

私はうれしくて、最近の事を話し始めた。

「私ね、前におばさんと話した時、本当はなやんでいたの。九月のピアノの発表会で失敗してから、自分に自信が持てなくなっちゃって……。でも、学校の先生や友達がすてきなアドバイスをしてくれて、少しずつだけど、がんばれるようになってきたんだ。」

「そんなことがあったのね。いいのよ、結衣ちゃんは結衣ちゃんのまま。おばさんも実は結衣ちゃんのピアノのファンよ。時々お家の前を通ると聞こえてくるピアノの音色にいやされていたのよ。いつも上手にひいているわよね。」

(美和子おばさんも聞いてくれたんだ)

私はおどろいた。自分の知らないところで、心配したり、気にかけてくれる人がたくさんいた事に気づいた。

「おばさん、今度おばさんのためにピアノひくから聞きに来て！」

「あら、いいの？それは楽しみ！」

うれしくて、ついつい自分からこんな約束をしてしまった。今だったら、人前でひくのも大じょう夫かもしれない。それに美和子おぼさんの前なら・・・。

9

私は最近学校に行くのが楽しくなくなった。安心して相談できる人と出会い、つらくなった時のにげ場所も作れたからだ。失敗はまだこわいと感じる時もあるけれど、その度に恵未先生や明希ちゃんに言われた言葉を思い出す。少しずつだけど、失敗してもいいんだという気持ちを持てるようになってきた。自分の失敗にばかり目がいついていたけれど、学校にいると友達も先生さえもしっばいしている事に気づいた。

（なんだ、私だけじゃない。みんなも同じように失敗しているんだ。失敗の大きさはあ
るかもしれないけれど、失敗しない人なんていないもんね。）

算数の授業の時、鈴花ちゃんが発表して答えをまちがえた。鈴花ちゃんはぺろっとしたを出して、私の方を見てニコッと笑った。あまりまちがえた事を気にしていない感じ

だ。でも、鈴花ちゃんは新しい答えをノートに書いて一生けん命だ。私は鈴花ちゃんす
ごいなと思った。失敗しても笑顔でいられる事、まちがえた事ばかりを気にしないで、
まちがえた事とむき合っている事。だれでもかんとんに出来る事ではないと思う。

休み時間に私は鈴花ちゃんに話しかけた。

「さっきの小数の問題、むずかしかったね。」

「うん。私まちがえちゃった。でも、まちがえた理由分かったから、次は出来そうかな。

結衣ちゃんは算数とくい？」

「ううん・・・苦手。私もさっきの問題まちがえたよ。自信なくて発表できなかったよ。

鈴花ちゃん勇気があるね。すごいなと思ったよ。」

「ありがとう。私も正直自信なかったんだ。でもちよう戦してみたかったの。」

「鈴花ちゃんは失敗こわくないの？」

「四月のころはこわかったの。でも、今は失敗してもいいかかって思えるようになった
んだ。失敗しても発表を続けていたら、先生がほめてくれたの。自分ががんばっている
ところを見てくれている人がいると、うれしいよね。またがんばってみようかなって気
持ちが出てくるんだ。」

鈴花ちゃんは私の知らないところで努力していたんだ。最初から失敗がこわくない人な

んていない。失敗をくり返す中で自分なりの方法を見つけていくんだ。

「鈴花ちゃん、前に私が元気がないって心配してくれたよね？覚えてる？」

「覚えているよ。最近では元気になったから、もう平気なのかなって思っていたけれど、今はだいじょうぶ？」

「実はね、私ピアノの発表会で失敗しちゃって、そこから人前で何かするのがこわくなっちゃったの。それに同じピアノ教室の男の子にいやみを言われて、それがずっと気になっちゃって、学校に行くのもいやになっちゃったんだ。」

鈴花ちゃんはうんうんとうなずいて話を聞いてくれた。

「そんな事があったんだね。それはつらかったね。そっか、だから結衣ちゃん、前より授業で発表しなくなったんだ。失敗すると回りがどう思うか気になっちゃうもんね。」

「そうなんだ。だからそれを乗りこえた鈴花ちゃんってすごいなって思ったよ。」

「大事な事話してくれたから、私も結衣ちゃんに話しちゃおうかな。実はね、私結衣ちゃんにアコがれていたの。結衣ちゃんほどの授業も積極的に発表するし、みんながいやな役もやってくれてかっこいいなと思ってたの。だから、私もそうなりたいな、自分

を変えたいなと思ってちよう戦してきたんだ。」

私は鈴花ちゃんの言葉に頭がまっ白になった。鈴花ちゃんが私にあげてくれていたなんて・・・自分がだれかにあこがれてもらえらるなんて想ぞうもつかなかった。

「こんな事言われたらおどろくよね？とつぜんごめんね。」

鈴花ちゃんは苦笑いをしている。

「そんな事ないよ。私にあこがれてくれていたなんてびっくりしちゃって。だって・・・私の方ができない事多いし、鈴花ちゃんの方が得意な事多いから。でも、そんな風に思っていてくれたなんて、とつてもうれいよ。ありがとう！」

「結衣ちゃん、もつと自分に自信持つていいと思うよ。人の目つて気になるけれど、自分でも気づかない長所を回りが見つけてくれる事もあるんだよ。失敗した事を悪く言う人もいるけれど、自分の良さを分かつてくれる人も必ずいるから。私は結衣ちゃんの味方だよ。」

鈴花ちゃんはずつと私を見てきてくれたからこそ、こんな言葉をくれたんだ。

「鈴花ちゃん、本当にありがとう！私なんか勇氣が出てきた。そうだよ、自分の事を悪く言う人より、自分の良さを分かつてくれる人に目を向けた方がいいよね。」

鈴花ちゃんはにっこり笑つてうなずいた。気づいたら私たちは手をにぎり合つて、スキ

ップをしていた。

10.

私は五年生になった。身長もぐんと伸びて、四年生の時はクラスの真ん中辺りだったのに、今では後ろから数えた方が早い。いよいよもうすぐピアノの発表会だ。今年は先生と相談して曲を決めた。去年の曲よりゆったりした曲だけど、ページ数もふえてむずかしい曲だ。時々去年の失敗を思い出してこわくなる事もある。でも、その度に私をささえてくれるまほうの言葉たちにつつまれている。

発表会当日は晴れて空がきれいだった。曲に合わせたブルーのドレスに、お母さんがかみをセットしてくれた。ドレスを着ると本番だなど背中がピンとする。

先に来ていた明希ちゃんに声かけられた。

「結衣ちゃん！ いよいよだね。きんちようするね。おたがい本番を楽しもう！」

「本番を楽しむ？」

「そうだよ。ここまで3か月がんばってきたんだもん。ステージは楽しんだもん勝ちだ

よ。あこがれのピアニストになりきるの。」

「そっか、なりきればいいよね！うん、私もきんちようするけれど楽しんでみる。」

二人はだきあって、それぞれのじゅんびをした。

私の番になった。おじぎをして会場を見わたすと、家族と目が合う。今日は美和子おばさんと鈴木ちゃんも会場に来てくれる事になっている。きつとこの会場のどこかで聞いてくれているはず……。

けんばんに手を置くと少し手がふるえる。目を閉じて心の中でつぶやく。

(ステージ、私のえんそうを楽しもう！)

ひき始めると自分でもおどろくほど落ち着いていた。去年とはちがう気がした。え顔がこぼれる。

いよいよ最後のフレーズ。失敗せずにひききれた！

ゆっくり手をひぎに下ろし、イスから立ち上がる。観客席に向かっておじぎをすると、大きな手がひびいた。体中にはく手がひびく。終わった。無事に最後までひききった。大きなミスはなく、練習の成果を出す事ができたと思う。

発表会が終わって、さやか先生が

「結衣ちゃんががんばったわね。今年のえんそうは、とても楽しそうにひいていてすてきだったよ。3か月練習ががんばったね。」
と言ってくれた。

「さやか先生、ありがとうございます。今年は楽しくひく事ができました。去年大きな失敗をしてしまったから、今年は大きなミスなくひききれてほっとしています。」

「成長したね。来年の発表会もがんばろうね！」

「はい、次の発表会が楽しみです。」
さやか先生はうれしそうに笑っていた。

会場の外に行くと、鈴花ちゃんと美和子おばさんが待っていてくれた。私を見つける
と鈴花ちゃんが走ってかけよってきた。

「結衣ちゃん、とっても上手だったよ。最後まで失敗しないでひけて良かったね。お
めでどう！」

「ありがとう。鈴花ちゃんのおかげで失敗するのがこわくなくなったよ。私今日はステ
ージを楽しめたんだ。」

「うん、それが伝わってきたよ。結衣ちゃんのえんそうを聞いていたら、私も楽しい気

持ちになったよ。」

鈴花ちゃんは五年生になってクラスがはなれちゃったけれど、今でも仲良しだ。私が一番安心して気持ちを打ち明けられる友達だ。私は失敗をした事で、鈴花ちゃんという親友ができた。最高のプレゼントだった。

「結衣ちゃん、今日は発表会にしようたいしてくれてありがとうね。この間ピアノを聞かせてもらった時より、またぐんと上手になっていておどろいたよ。とつてもすてきなえんそうで感動しちゃったよ、おばさん。」

「美和子おばさん、来てくれてありがとう。おばさんに聞いてもらいたかったから、うれしい。私乗りこえられたかな？」

「もちろんよ！あなたは自分の力でりっぱに乗りこえたわよ。」

「そんな事ないよ。おばさんや友達、家族や先生がはげましてくれたから乗りこえられたんだよ。」

おばさんは首をふった。

「そうね、たしかにみんなが結衣ちゃんをはげましたかもしれない。でもね、あの大きなステージで一人でえんそうしてがんばったのは、あなた自身だから。がんばったね！」

美和子おばさんの言葉に私は泣きそうになった。おばさんはピアノをひいた私の手を何度も何度もなでてくれた。

家に帰るとほっとして体の力がぬけていった。ソファにすわると、今日のえんそうがよみがえる。

（私の今年のえんそうは、どんな音色だったかな・・・）

ふとりビングのピアノをながめながら、そんな事を考えていると、

「結衣、今日は楽しんでひけてたね！」

「お姉ちゃん、上手にひけたね。」

「そうだな。毎日がんばって練習していたもんな。」

家族のみんながほめてくれた。何だか照れくさい。ジュンが私のほっぺをペロっとなめた。

「ありがとう！去年のような失敗がなくて良かったよ。それにとっても楽しくひけたんだ。私ステージでひくの好きみたい。」

「失敗したっていいのよ。でもその失敗を今日の結衣のように、乗りこえられたら、自分に自信がつくよね。自信ってかんたんに身につくものじゃないし、少しずつでいいの

よ。それに、ある時何かヒントになって、今までなやんでいたのがうそみたいになうま
くいく事もあるの。いろんな人に自分の話をする中で、ヒントがもらえる事もあると思
うわ。」

お母さんは去年の失敗の後、ピアノの事はほとんど何も言わなかった。きつとお母さ
んなりに見守ってくれていたんだと思う。

「そうだよね。私ね、去年失敗して悔しくて、祥吾くんにいやみを言われたのもつらく
て学校の先生や友達、美和子おばさんに相談したんだ。みんな私の気持ちによりそって
話を聞いてくれて、大事な事を教えてくれたんだ。今年成功したのは、みんながくれた
まほうの言葉のおかげでもあるんだ。」

「そうだったのね。自分を理かいてくれる人がいるってうれしいよね。結衣、勇気を
出して相談できたのね。がんばったね。」

お母さんはちよつとなみだぐんでいた。そしてあわててキッチンに行つて、温かいココ
アを入れてくれた。

くつひもをむすんで、手ぶくろをする。げん関のドアを開けると、息が白い。今日は
月曜日。私が苦手な一日が始まる。ジュンがげん関まで見送りにきてくれる。

ピアノの発表会が終わってから私は変わったと思う。授業中の発表もい今までのようにできるようになった。ほかほかルームに行かなくても、学校が楽しめるようになった。月曜日はやっぱりゆううつな日もあるけれど・・・。

校門に着くと鈴花ちゃんが待っていてくれていた。私は大じょう夫。また失敗する事があるだろうけれど、その度にちよう戦しよう。こまった時は鈴花ちゃんや恵未先生に相談もできる。一人じゃないんだ。

そんなことを考えたら、月曜日だけれど、気合が出てきた。

もうすぐ二学期が終わる。一年生のクラスからクリスマスの歌が聞こえてくる。

今年はサンタさんに何をたのもうかな？